

# 小規模大学における学生支援の試み

-奈良産業大学学生相談室3年間(2009~2011)の活動-

菅 徹  
奈良産業大学情報学部

## 概要

奈良産業大学の学生相談は、「学生支援の3階層モデル」(苦米地レポート2007)をスタンダードモデルとして活動している。その活動内容を2009年4月より2011年3月までの三年間について検証していく。初めに、上記、3階層モデルについて、その構造を紹介する。そのあと、年度ごとに個別面接の統計を示し、解説を加える。また、3階層モデルに沿った実践活動について、その内容と評価をおこなう。最後に、三年間の活動を総括して、今後の課題を明らかにした。

## はじめに

筆者が本学の学生相談に関わってから4年目が終わろうとしている。平成24年度については、年度末を二ヶ月残している。そこで、平成23年度までの三年間について足跡をまとめる。本稿では、筆者が高等学校の現場でおこなってきた活動をどのように積み上げ、大学で発展・推進してきたかを概観する。さらに、今後の課題を展望する。

## 1. 問題と目的

大学という高等教育の現場に、高等学校現場での教育相談に関するノウハウを、どのように活かせるかが、大きな問題であった。しかし、実際に取り組んでみると、基本的には何ら変わることはなかった。少しだけ違うところは、学生の年齢と社会に出る前の最後の舞台であること。保護者の存在が微妙に違うところである。青年期中期から後期に位置している大学生は、心理的には、親から自立していると思われがちだが、モラトリアムの時期にあって、かつての高校生のメンタルに近いと思われる。

また、3年生になれば、インターンシップや就職ガイダンスが始まり、次第に就職モードに変化していくのが通常である。しかし、特定の季節限定である、郵便局等のアルバイトをすることが可能な高校生時代から、大学入学後も、「アルバイトをしなさい」ではなく、「アルバイトができない」学生が存在しているのである。さらには、「障がい」学生へのサポートをおこなう使命を課せられている。そのような、2009年4月以後、三年間について、その実践内容と評価をおこなう。

## 2. 2008(平成20)年度<sup>1)</sup> “学修支援センター”の活動

2008年度までは“学生サポート課”と“学修支援センター”が学生支援の任にあっていた。“学修支援センター”規定では、「第2条(目的) センターは、本学におけ

る学生の正課及び正課外の学修活動を支援し、より充実した学修の成果を得させるために必要と認められる事業・業務を実施するための共同利用機関として、本学の学生及び本学教職員ほか本学学生の教育・学修に関わる者の利用に供することを目的とする。」とある。

以上の規定は全学生に対しての“大学での学び”をバックアップしていこうという試みである。かつど内容は①「資格試験自習」、②「リメディアル何でも相談」であった。現在のリメディアル教育の考え方が、実践されていたことになる。この時点で活動が定着していれば、筆者が翌年から学生相談を行う流れに、つながっていったものと思われる。ただ、この活動が1年間で終息したことは非常に残念であった。

### 3. 学生支援のスタンダードモデル

およそ、国内における学生相談の指針となるのは、「大学における学生相談体制の充実方策について」<sup>2)</sup> 通称、苫米地レポートである。レポートによると、4年制卒業までの学生生活サイクルについて三つのステージに分けて考える。

第1ステージは初期適応の時期として入学から、1年生の終わりまで。

第2ステージは2・3年生の時期である。大学に自分の居場所を作ることが出来た学生は、次のステージに進む可能性が出てくる。

第3ステージは4年生になっている。大学の内外で種々体験したことを統合する時期に当たる。入学してからの3年間を総括するとともに、就職試験への対応を迫られる。

以上、三つのステージを想定した学生相談の枠組みをどのように構築していくかが課題

であった。さらに、「学生支援の3階層モデル」<sup>2)</sup>を本学の組織に援用した。

#### 第1層 日常的学生支援

大学では、授業で新しい知識を身につけるだけでなく、学生同士、教職員との横のつながりを通して、社会への適応にとって重大な影響を及ぼすものと考えられる。

#### 第2層 制度化された学生支援

本学の初年次の「アドバイザーシステム」による導入演習や3・4年次の「ゼミナール」、さらに「オフィス・アワー」等、教員による活動である。また、職員による学生支援のための学務課、就職課等における窓口業務。

そして、学生支援センターでの日常的業務のすべてが、制度化された学生支援にあたる。



(図1-2) 学生支援の3階層モデル

図3-1 学生支援の3階層モデル

### 第3層 専門的學生支援

第1・2層では解決しがたい問題が生じた場合に専門的學生支援にあたる。学内だけでは解決しがたい場合、外部機関と連携可能な組織であることが望まれる。そして、すべての学生・教職員が、いついかなるときにも利用可能な機関、すなわち、「全学共通基盤」<sup>2)</sup>である必要がある。学生支援の3階層はそれぞれに有機的な関連をもって、「協働・連携」を図ることは論をまたない。

## 4. 個別面接の実際

### 4.1 2009（平成21）年度 個別面談の実際

筆者の本学での立場は、教職課程の授業を担当している教員であり、かつ学生支援センター専任カウンセラー（臨床心理士）である。一般に教員は、研究が主な仕事であり、学生相談支援室の顧問・アドバイザー・コーディネーターとしての関わりになっていることが多い。その意味では、授業と相談活動を兼務しており、かなり多忙である。前年度まで、非常勤のカウンセラーによる個別面接対応で、週二回ほど来学していたようだ。従って、カウンセラーから日常的な学生への働きかけは期待できなかつたと思われる。カウンセラーが常駐しているということは、これまでと何がどのように違うのか、教職員にとっては、

表4-1 2009（平成21）年度 月別面接回数

| 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 合計  |
|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|-----|
| 11 | 13 | 27 | 26 | 17 | 11 | 17  | 12  | 14  | 18 | 7  | 6  | 179 |

興味津々であったであろう。事実、「来談者実人数34名、延べ179回の面接」（表4-1）は、それ以後の各年度の面接回数と比べると約30%増となっている。アドバイザー教員が自分のゼミ生を連れてきたり、就職課の方が、就職支援の方法について、相談に来られたり、国際交流センターからは、留学生に対する支援について相談を受けた。

### 4.2 2010（平成22）年度 個別面談の実際

筆者の相談活動は二年目に入った。来談者は、前年度と比べて、実人数が34人から、19人へと少なくなり15人減となった。カウンセラーが筆者一人、授業との兼担であることを考えるとこのあたりが限界であると考えられる。しかし、新たな来談者として、

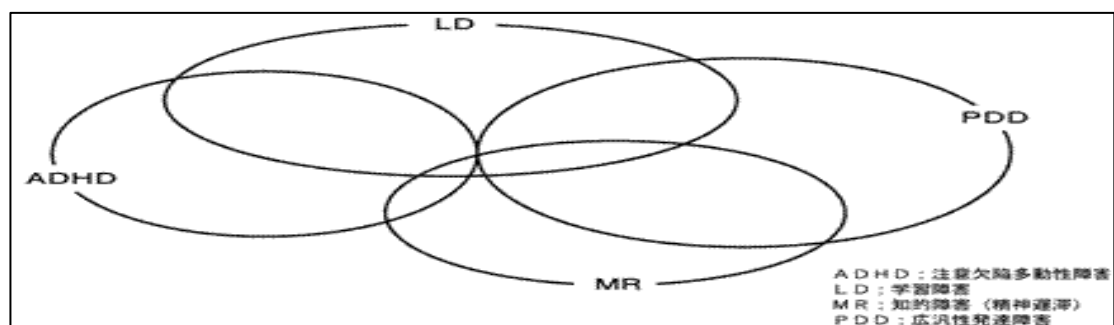


図4-1 知的障がいと各発達障がいの相互関係（文部科学省 2003）

「発達障がい」を疑われる学生への取り組みが急務の課題であることが、相談内容の内訳（表4-2）を見ていくと、年間を通じて個別面接の中に「発達障害」のある学生との面接が最も多くの数字となっていることが容易にわかる。2010年度以降、今日に至るまで、「障がい学生」という括りでの対応が必要になってきた。

これは、今後も学生相談の主要な取り組みになると考えられる。1年間を通じての定期的な個人面接は、全体で15人・96回。義務教育段階での発達障がい疑われる児童生徒の割合は、およそ6.3%であることが、文部科学省の調査で、明らかになっている。今後、図4-1に示すような、複合した障がいのある児童生徒が、学年進行で高等教育機関にも進学してくることは確実である。少子化が進行している現状を鑑みるならば、本学の学生支援のあり方をもっと、現状に即した形にしていくことを怠ってはならない。

次に、表4-2について、面談学生数では、7、9、11、12、1月の面談数が二桁になっている。一般的傾向として、前・後期の終わり前後に多い。教育相談の世界では、“締め切り効果”という。何事かの決断にタイムリミットが迫ってくると、自分の今後について、直面させられる。このようなときに、カウンセラーや信頼する人に話して、自分の決断を支持してもらいのである。「背中を押してほしい」というサインと解することができる。

表4-2 2010（平成22）年度 月別面接回数（保護者・教職員含む）

|       | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 合計 |
|-------|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|----|
| 面談学生数 | 8  | 4  | 2  | 12 | 2  | 16 | 5   | 19  | 12  | 11 | 2  | 3  | 96 |
| 保護者   | 0  | 0  | 0  | 2  | 2  | 5  | 1   | 0   | 0   | 0  | 0  | 1  | 11 |
| 教職員   | 2  | 1  | 3  | 2  | 1  | 2  | 2   | 3   | 2   | 3  | 6  | 2  | 29 |

表4-3 2010（平成22）年度 面接内容内訳

| 月              | 4 | 5 | 6 | 7  | 8 | 9  | 10 | 11 | 12 | 1  | 2 | 3 | 合計人数 |
|----------------|---|---|---|----|---|----|----|----|----|----|---|---|------|
| 体調不良           |   |   |   |    |   |    |    |    |    |    |   |   | 0    |
| 行き場の無い学生生活上の悩み | 2 | 2 |   | 3  | 2 | 4  | 2  | 2  |    |    |   |   | 17   |
| 進路             |   |   |   | 1  |   | 3  |    | 1  | 1  | 1  |   |   | 7    |
| 対人関係           | 2 |   |   | 4  |   | 1  |    |    | 2  | 1  |   | 1 | 11   |
| 学修             |   |   |   |    |   |    |    |    |    |    |   |   | 0    |
| 発達             | 4 | 2 | 2 | 2  |   | 7  | 3  | 8  | 4  | 2  | 1 | 1 | 36   |
| 複合             |   |   |   | 2  |   | 1  |    |    |    |    |   |   | 3    |
| 計              | 8 | 4 | 2 | 12 | 2 | 16 | 5  | 19 | 12 | 11 | 2 | 3 | 96   |

また、保護者の面接が9月に集中している。これは、9月下旬に保護者会が開催されて、前期の成績や、個々の学生について、生活状況や問題点をアドバイザーと意見交換する場である。このときに、保護者の要望に、大学カウンセラーとして面談した数字である。教職員の面談数29人は、ほとんどが、アドバイザーや授業担当者として、自分と関わりのある学生についての相談であった。少しずつではあるが、大学カウンセラーとして、認知

がなされていることを感じる事ができた。

### 4.3 個別面談の実際 2011（平成23）年度

個別面談数は、表4-4の通りである。延べ回数、100回前後というのが、この三年間の平均である。また、実人数は20人で、こちらの方は例年より増加している。特筆すべきは、「発達障がい」のある学生の定期的な面接回数が、増加したことであった。

表4-4 2011（平成23）年度 月別面接回数（保護者・教職員含む）

|       | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 合計  |
|-------|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|-----|
| 面談学生数 | 16 | 15 | 10 | 17 | 6  | 3  | 11  | 12  | 5   | 7  | 4  | 2  | 108 |
| 保護者   | 0  | 1  | 0  | 1  | 3  | 4  | 3   | 0   | 0   | 0  | 3  | 0  | 15  |
| 教職員   | 3  | 4  | 3  | 5  | 2  | 3  | 2   | 2   | 0   | 2  | 4  | 5  | 35  |

表4-5 2011（平成23）年度 相談内容の内訳

|      | 勉強・進路 | 心理・適応 | その他 | 合計  |
|------|-------|-------|-----|-----|
| 実人数  | 4     | 12    | 4   | 20  |
| 延べ回数 | 5     | 89    | 14  | 108 |

## 5. 学生支援の充実

### 5.1 施設の拡張・充実

2009、2010年度の二年間の実践の積み重ねを背景に、かねてより当局に要望していた学生支援センター・相談室施設の拡張・充実がおこなわれた。

平成23年四月より、学生支援センターが5号館一階から2号館二階に新設移転されたのである。スペースは従来の四倍となった。事務職員の執務スペース（窓口業務含む）、学生の休憩スペース、保健室、三つの個別面接室、会議室、学生支援センター長室である。この新しい学生支援センターの開設によって、新たな学生相談がスタートしたのである。

### 5.2 「学生支援の3階層モデル」による学生相談活動の充実

#### 5.2.1 リメディアル教育の実際

第2層（図3-1 学生支援の3階層モデル）にあたる、学生に対するリメディアル（remedial）教育が開始されたことである。これは、大学教育を受けるために必要な基礎学力を補うために行われる補習教育と解釈され、全国の各大学で試みられている。学力が著しく不足している学生を支援するために実施する教育である。

本学では、2011年度、対象学生の選定をどのような基準で選ぶのかについて、学生支援センター運営委員会で論議がなされた。その結果、1・2年生を対象とし、前期の基礎教育科目（日本語コミュニケーション、基礎数学）で、原則として前期試験で60点未満（不合格点の学生）を対象学生に、「夏期・冬季リメディアル自主勉強会（国語・数学）」をおこなった。その手順を述べる。前期成績結果を学生支援センターが担当教員から入手し、9月12日～17日の六日間にわたって実施した。

場所：学生支援センター（2号館2階） 午前：1・2時限 午後：3・4時限

教材等：日本語コミュニケーションと基礎数学Ⅰそれぞれの対象者には、下記の国語と算数の教材を用い指導する。その他の学生については、希望に応じ教材を選択。

- (1) 国語：① 天声人語 ② 日本語トレーニング ステップ1・2  
毎回最初にこれの書き写しをさせ、余裕があれば②の問題集をさせる。
- (2) 算数：「小学校わくわくワーク」
  - ・小学校3年生レベルの計算問題を中心に学力を確認。
  - ・レベルに応じて別の学年・分野の問題用意。
- (3) 2011年度基礎数学Ⅰ前期試験問題
  - ・つまずき箇所の発見、学習効果のチェックなどに適宜活用。
  - ・対象学生の2011年度基礎数学Ⅰ前期試験の採点済答案コピー用意。
- (4) 基礎学力講座（就職課主催）の予復習教材
  - ・講座で使用した問題を用意。

この自主勉強会にビジネス・情報の両学部及び研究所から、夏期は延べ63人の教員が協力した。一方学生の方は、対象者は百名前後に対して、自主勉強会に参加したのは、十名程度であった。教員の意気込みと学生の実態はかけ離れていて、かみ合わなかった。

### 5. 2. 2 第3層「専門的支援」活動

個別面接による学生相談は、2011年度は、実数20人、延べ面接回数108回であった。教職員（35人）、保護者（15人）、からの個別面接の依頼も9月の保護者懇談会前後から増加してきた。また、個別面接にあたっては、問題の早期解決のために、アドバイザーの協力の下、聞き取り内容を「学生援助シート」<sup>3)</sup>に書き込むことによって、効果的な解決方法を可視化できるようにした。また、「学生援助シート」<sup>3)</sup>の前提として、学生相談活動を円滑に推進するための方策として、「災害時救急医療全体システム」（トリアージ）を「学生援助トリアージ」<sup>4)</sup>として援用・公表して、個々の学生を査定するツールとして活用する準備を整えた。

### 5. 2. 3 第2層「制度化された学生支援」活動

学生相談研修会は2010（平成22）年度は、筆者が講義形式で3回実施した。内容は、カウンセリングの初歩的解説とロールプレイであった。実際に教師役・学生役という組み合わせで行い、相手の気持ちにどこまで共感できるのか、参加者に味わってもらった。参加された方の感想の一部を紹介する。

・短時間であってもロールプレイを第三者に見てもらって、コメントをもらう（与える）ことは格段の効果の違いがあると思います。なるべく早期に、全教職員にこうした機会を設けていただきたいと思います。自分が過去に担当した学生の役を演じることは、いかにその学生のことを知らなかったかという気付きを与えてくれるものではありませんが、場合によっては（カウンセラー役には伏せた形で）クライアント役のシナリオを複数用意して、その中から演じてもらうというものでもいいかも知れません。プライバシーに配慮した上で、「このような解決事例があった」とご紹介頂ければ、モチベーションが上がると思います。

2011（平成23）年度、の5月より、「学生相談定期研修会」<sup>3)</sup>を、ほぼ月1回のペースで通算9回実施した。参加対象は全教職員、そして自由参加原則である。同時に「三室山」（「学生相談だより」）<sup>3)</sup>紙上で、毎回の研修内容の紹介と教職員の反応を掲載してきた。このような活動を通して、教職員の間には徐々に理解が深まってきた。研修会を毎月実施するということで、筆者にとっては、授業と校務の合間を縫っての準備を強いられた。しかし、この経験は得難い実践となった。まさに、「継続は力なり」という格言の通り、終わってみれば、教職員の方々に「学生相談」の必要性を感じて頂くまたとない機会となったのである。

奈良産業大学に、「学生相談」という一石を投じた結果、その波動は大きく広がっていき、次年度への展望が明らかになった。

## 6. 本学の学生相談活動全体のまとめ

### 6. 1 学生相談活動全体の機能評価

学生支援の3階層モデル（図3-1）にしたがって、筆者が私見で、本学の学生相談支援活動全体の機能評価を4段階評価（×・△・○・◎）した。以下に示す。そして、その詳細を年度別に見ていく。

表6-1 学生相談活動全体の機能評価

|        | 第1層 | 第2層 | 第3層 |
|--------|-----|-----|-----|
| 平成21年度 | ×   | ×   | ×   |
| 平成22年度 | △   | △   | △   |
| 平成23年度 | △   | ○   | △   |

### 6. 2 2009（平成21）年度の機能評価

第1層は、5号館1階で、学生支援の窓口業務が始まった。そして、その存在を内外に広報していった。また、学生の個別相談については、A4版三つ折りのリーフレットを作成し、学生が立ち寄る場所に設置した。「第3層 専門的學生支援」に特化した治療的な相談活動を行っていたのである。そこには、筆者が理想とする「開発的・予防的」な学生相談は、なされていなかったのである。したがって、機能評価は、すべて×とした。

### 6. 3 2010（平成22）年度の機能評価

「発達障がい」のある学生への取り組みが急務の課題であった。面接内容分類（表4-3）を見ていくと、年間を通じて個別面接の中に「発達障がい」のある学生との面接が最も多くの数字となった。これ以後、今日に至るまで、「障がい学生」という括りでの対応が必要になってきた。これは、今後も学生相談の主要な取り組みになると考えられる。

また、第2層に関わる内容で、個別の学生相談は、多くがアドバイザー教員からの依頼での相談面接であった。学生の自主来談はなかった。この状態は、治療的な教育相談の枠を出ていない。しかし、二年間の取り組みで学生相談に対する認識を深まり、全教職員対象の学生相談研修会が軌道に乗り始めた。このような実践活動の活発化に鑑み、機能評価を、すべて△とした。

#### 6. 4 2011 (平成 23) 年度の機能評価

「第3層 専門的學生支援」にあたる、リメディアル教育が夏休み、冬休みにも、実施された。これは、当局の予算的な配慮がなければ実現できないものだ。學生支援に本腰で舵を切ったものと理解した。

次に上記同様、第3層「専門的支援」にあたる、個別面接による學生相談についてである。プール学院大学教授の中村健氏の指導を受けながら、効率的・効果的な學生との個別面接のために、「學生援助シート」を採用し、試験的に活用してみた。

また、第2層「制度化された學生支援」にあたる、學生相談定期研修会を教職員向けに実施した。同時に「三室山」(「學生相談だより」)を発行した。以上のことを勘案した結果、第2層を○とした。第1層「日常的支援」は、今一步教職員への浸透ができていないということで△、そして第3層についても、目指すべき理想には、遙かに届かないと判断したため、△とした。今後の努力目標を明らかにすることで、◎にしていくための実践を重ねていく。

#### 7. 今後の課題

第1点目は、「學生援助シート」の作成・更新ができなかったことと、「學生援助トリアージ」を使用することができなかったことである。実用化することを目標とする。

第2点目は、発達障がいのある學生に対して、十分な援助ができなかったことである。特に、就労支援を就職課及び外部機関と連携して進めていく。

第3点目は、リメディアル教育のさらなる推進である。自主勉強会の充実を図っていく必要が求められる。

#### 引用・参考文献

- 1) 菅 徹, 2010, 小規模な大学における學生支援の試み -奈良産業大学學生相談室の活動から-, 奈良産業大学紀要第26集, Vol. 26, pp1-10
- 2) 独立行政法人日本學生支援機構, 2007, 「大学における學生相談体制の充実方策について」
- 3) 菅 徹, 2011, 小規模な大学における學生支援の試み(2) -奈良産業大学學生相談室の活動から-, 奈良産業大学紀要第27集, Vol. 27, pp103-112
- 4) 菅 徹, 2012, 小規模な大学における學生支援の試み(3) -奈良産業大学學生相談室の活動から-, 奈良産業大学紀要第28集, Vol. 28, pp173-182

### **A trial of assisting students who need support and advice in a small-scale university**

-Activity of counseling room in Nara Sangyo University  
during the three years (2009~2011) -

Toru Kan